

【「出雲流庭園」と呼んでよい庭とは？】
36年経過した「出雲流庭園」の技法の検証と整理

「庭園文化研究分科会」 武田 隆 司

1. はじめに

「出雲流庭園」の定義は様々であるが、これまで昭和50年に発行され命名の元となった「出雲流庭園の歴史と造形」で分類されている庭＝“松平不昧の茶道の影響を受け、明治以降確立され豪農や豪商を中心に広まった平庭式の枯山水の庭、典型的なものとしては斐川の江角氏(原鹿)庭園等であり、飛び石等に特徴がある庭”と定義されるようであるが、この著書にもあるように典型的な出雲流庭園という表現は一部の庭園であり、その他は出雲流の技法が部分的に見られるという表現になっている。つまり「出雲流庭園」と「出雲流技法の見られる庭園」があるわけである。また、今年日本の名工に選ばれた松江市在住の造園家、角隆司氏は「出雲流庭園という確立された流派はない。むしろ出雲風庭園と呼ぶべきである。」と言っている。「流派」と「風」の違いはあるものの、やはり定型のパターンがあることには間違いはない。それでは我々が一般に呼び、また今後地域の観光資源として一般の人々に堂々と紹介してもよい「出雲流庭園」とはどのような庭であるのか。どの程度までの庭を「出雲流庭園」と呼んでよいのか。

今年、「出雲流庭園の歴史と造形」(以下 S50 年著書)を参考とし、36年経過した今、平成21年から視察した庭について、その作庭技法を検証、確認し、整理してみたいと思う。

2. S50年著書に掲載されている出雲流庭園の分類

下表は、S50年著書に掲載されている出雲流庭園の分類である。 囲い文字は H21～23年に視察した23箇所の庭園である。網掛けは掲載されていないが視察した庭園である。

典型的な出雲流庭園とされる庭園(技法が色濃く見られる)	出雲流の技法が見られるとされる庭園	ほとんど出雲流技法が見られないとされる庭園
<ul style="list-style-type: none"> ・糸原諒氏庭園(奥出雲町) ・秋上氏庭園(松江市) ・広江氏庭園(松江市) ・佐草氏庭園(松江市) ・加藤氏庭園(松江市) ・康國寺庭園(出雲市) ・千家氏庭園(枯山水庭園) (出雲市) ・秦氏庭園(出雲市) ・布野氏庭園(出雲市) ・願楽寺庭園(出雲市) ・江角栄氏庭園(出雲市) ・勝部氏庭園(出雲市) ・江角昇氏庭園(出雲市) (出雲文化伝承館庭) ・八雲本陣庭園(松江市) ・山本氏庭園(出雲市) ・木佐本陣庭園(出雲市) ・松江歴史館庭園(掲載なし) 	<ul style="list-style-type: none"> ・糸原義隆氏庭園(奥出雲町) ・桜井氏庭園(奥出雲町) ・普門院庭園(松江市) ・菅田庵庭園(松江市) ・黒崎氏庭園(出雲市) ・乗光寺庭園(松江市) ・本石橋家庭園(出雲市) ・石橋酒造庭園(出雲市) ・旧卜蔵氏庭園(奥出雲) ・多門院庭園(出雲市) 	<ul style="list-style-type: none"> ・一畑寺庭園(出雲市) ・鱒淵寺本坊庭園(出雲市) ・北島氏庭園(出雲市) ・千家氏庭園(小池泉庭園) (出雲市) ・木幡山荘庭園(松江市) ・雲樹寺庭園(安来市) ・蓮乗院、古門堂庭園 (安来市) ・城安寺庭園(安来市) ・矢野氏庭園(出雲市) ・明善寺庭園(大田市) ・和田氏庭園(大田市) ・万寿寺庭園(松江市) (掲載なし)

S50 年著書によると出雲流庭園が確立されたのは明治以降とされているが、掲載の庭は、江戸期以前に築庭され、明治以降に改修されて出雲流の技法が取り入れられたものがほとんどであり、当初から出雲流庭園として作庭された庭は江角栄氏、江角昇氏庭園等 6 箇所程度である。よって作庭時期だけで出雲流庭園か否かを判断することは適当ではないと思われる。

今回は、作庭時期にとらわれず、S50 年著書で指摘されている出雲流庭園の特徴となる作庭技法をどれだけ取り入れているかを確認することで、一般的に出雲流？庭園と呼ばれている庭の「出雲流庭園度」や特徴を検証する。

3．出雲流庭園度の指標（技法）

S50 年著書に書かれている出雲流庭園の特徴を下表の 7 つの指標に分類し、具体的な技法 44 項目について該当するかどうかチェックリストを作成し、視察した 23 の庭園について現地を確認した。

出雲流庭園度の指標	具体的な技法（44 項目）
1．庭の配置	・建物の南西部（方位）・アプローチ等
2．基本的な構造	・平庭・枯山水（池の有無）・L字型・庭の境界等
3．茶道の要素	・茶室（茶席）・つくばい・鉢前・竹垣の有無等
4．飛び石の特徴	・敷砂・高さ・丸石小・加工石（短冊・石臼）・踏分石大・ ・短冊石（配置）・靴脱ぎ石（御影石）or 自然石は 2 箇所以上
5．石組み・灯ろう	・簡素な石組み・T字形石組・来待石灯ろう・兜形等
6．庭木の特徴	・緑量少・常緑樹主体・クロマツ（雲竜仕立）等
7．建物周りの特徴	・床高・犬走りの形態等

4．調査結果（出雲流庭園度と分類）

次頁の棒グラフは、出雲流庭園の技法 44 項目の該当率 = 出雲流庭園度を示したものである。該当率の高い順に A ~ D に分類している。

典型的な出雲流庭園

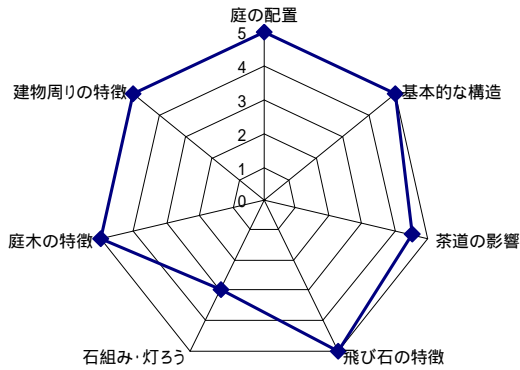
A に属する庭は、江角昇氏庭園（出雲文化伝承館）、江角栄氏庭園（原鹿庭園）、松江歴史館の 3 庭園であり、松江歴史館以外の 2 庭園は S50 年著書でも斐川地方の豪農庭園の典型的なものと記載されており、観光案内でも「出雲流の庭」として紹介されているように代表格といってもよいであろう。特に江角昇氏庭園（出雲文化伝承館）は、S50 年の調査以降に移築復元された際に増設された茶庭に出雲流の技法が多く用いられており、さらに出雲流庭園度が高まったといえる。また松江歴史館は今年開園したばかりの庭であるが、建物の形状は違うものの、飛び石の技法や茶道の要素等の特徴を忠実に採用している。

庭の配置、基本的な構造

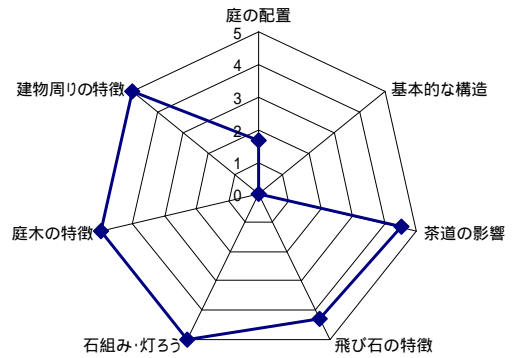
B に属する 8 庭園は、比較的バリエーションに富んでおり、出雲流庭園と呼ぶことがふさわしいかどうか迷うものもある。奥出雲にある系原氏庭園は 80% 近い該当率があるが、平成 21 年度の研究報告でも述べたように、周辺の山を取り込んだ立体的な庭であり、庭の方位も出雲流とは異なり、池泉を持つ奥出雲特有の庭の特徴を持つ。B に属する 8 庭園のうち普門院庭園

にも池がある。これらの庭は江戸期以前の庭に明治以降出雲流の手法で改修が行われたことによるものである。出雲流庭園の基本構造は平庭の枯山水であり、池の有無で言えば出雲流庭園から外れることになるのかもしれない。ただしその他の指標は下図（右）のとおり、江角昇氏庭園（左）と比較しても、出雲流の特徴を多く持つことがわかる。

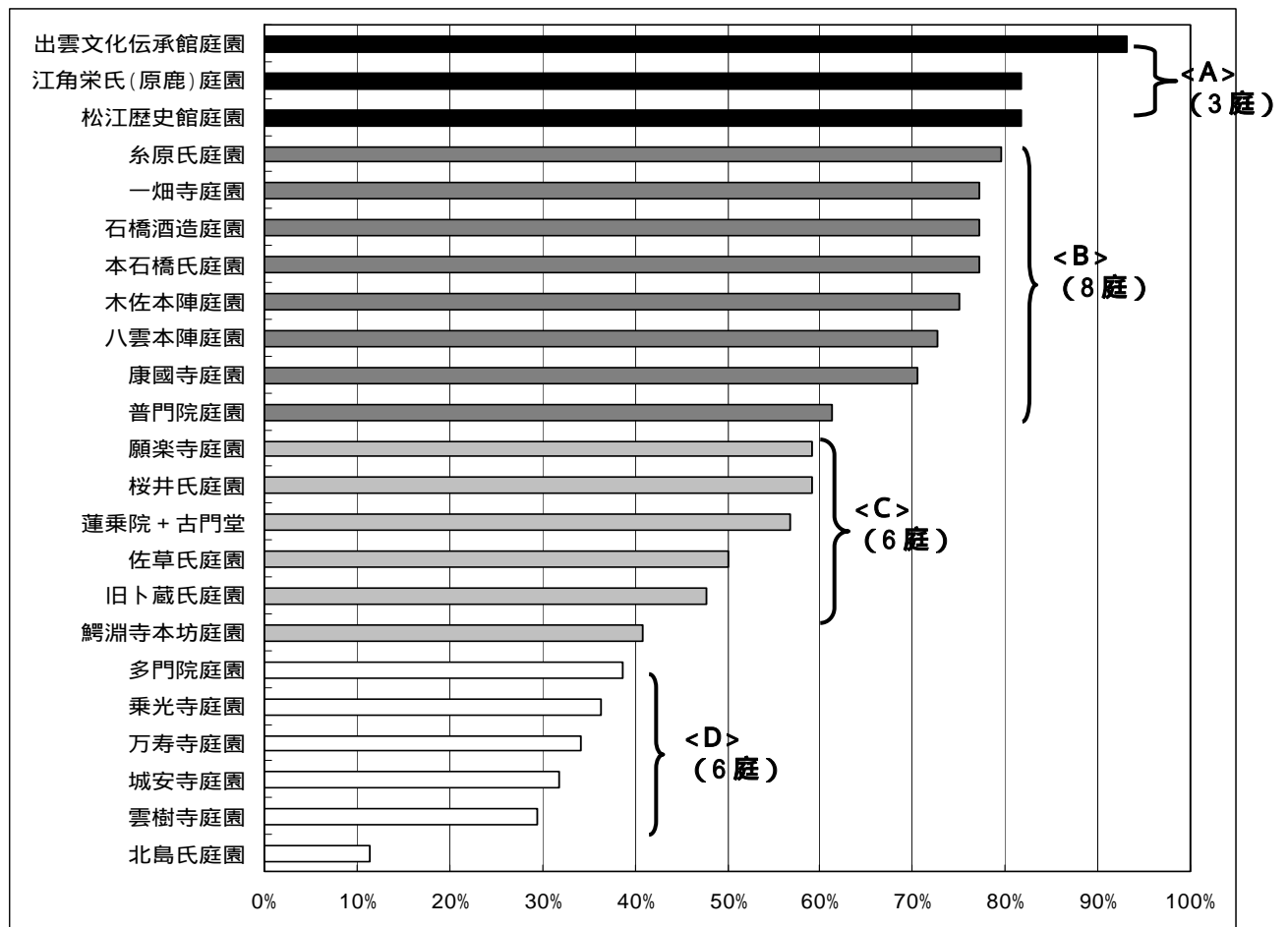
江角昇氏庭園（出雲文化伝承館）1位



糸原氏庭園 4位



< 出雲流庭園度 >

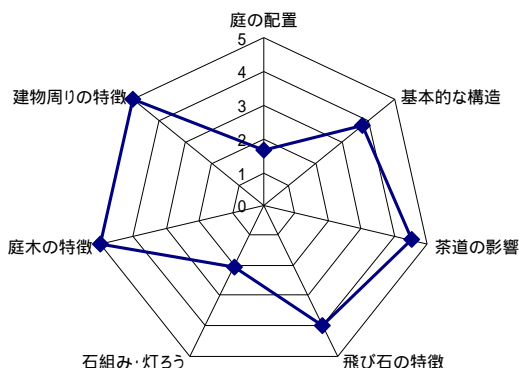


A : 80%以上、B : 60~80%、C : 40~60%、D : 40%未満

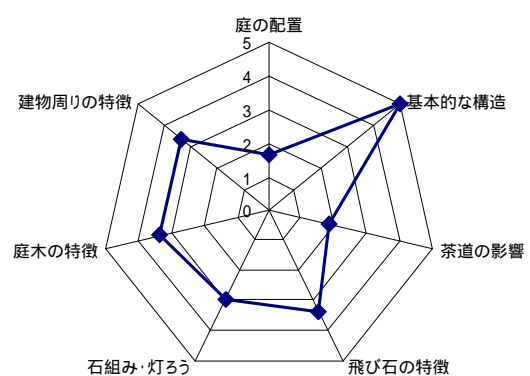
茶道の要素

出雲流庭園の特徴として、茶庭的要素を強く持っているということである。茶室や茶庭を備えた庭も多く、ない場合も飛び石やつくばい等が備えられ、茶庭の雰囲気を見せている。A, B群の庭では江角栄氏(原鹿)庭園以外の庭にはすべて茶室がある。茶室があることによりそれに関わる飛び石やつくばいの技法もカウントされることから、出雲流庭園度も上がることになる。たとえば、一畑寺庭園は、S50年著書では「出雲流とは多少異なる」とされているが、茶室周辺をチェックしたところ、かなり該当事項があり(下図左)出雲流庭園度が高くなる。一方C群の願楽寺庭園は、庭の基本的な構造や飛び石は該当が多いが、茶室がなく、それに関わる技法も少ないことから、出雲流庭園度は低くなる。(下図右)

一畑寺庭園 5位



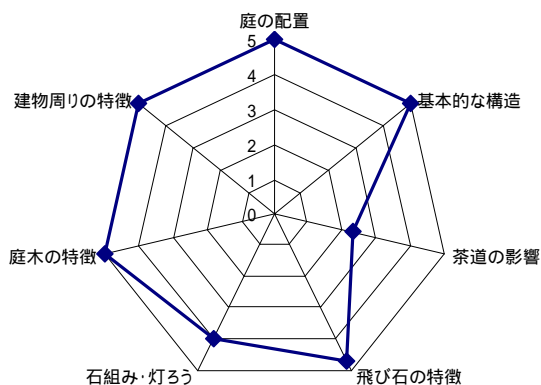
願楽寺庭園 12位



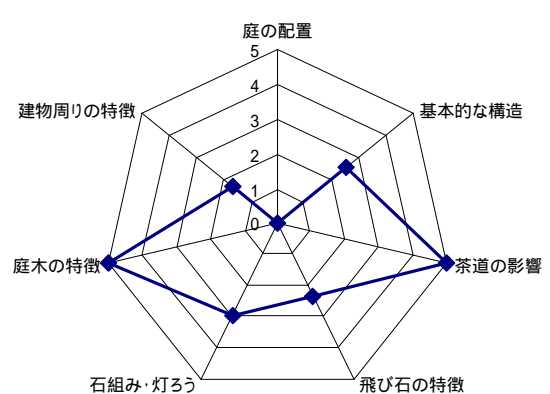
飛び石の特徴

飛び石については、高さ、形状、配置については、A, B群ともほとんどの庭園が出雲流の特徴を兼ね備えている。また、短冊石、石臼、御影石靴脱石等の加工石の使用も特徴の一つであるが、A, B群の中で唯一普門院庭園には短冊石、石臼が使用されていない。よって、これらの特徴的な配置技法もカウントされないため、出雲流庭園度の評価に大きく評価に影響している。(下図右)

江角栄氏(原鹿)庭園 2位



普門院庭園 11位



灯ろう

灯ろうについては、ほぼ全庭園に地場産の来待石灯ろうが据えられていたが、その形は六角形、生込み形、雪見形、置き形等様々なデザインのものがあり、当地方特有とされる兜形灯ろう（写真左）は松江歴史館、糸原氏庭園以外は確認できなかった。今後灯ろうに注目した調査を行うことも興味深い。

庭木

庭木については、緑量が比較的少ない、常緑樹が主体、雲龍仕立てのクロマツ（写真右）の3項目のみが指標となるが、ほとんどの庭は常緑樹が主体であり、雲龍仕立てのクロマツは約半数の11庭園に見られた。緑量については、奥出雲地方の庭園のように裏山を取り込んだ庭以外には比較的少ないといつてよいが、康國寺や佐草氏庭園のように樹木の成長により、緑量が増えたと思われるものもあった。



< 兜形灯ろう >（松江歴史館）



< 雲龍仕立てのクロマツ >（出雲文化伝承館）

5. 調査のまとめ

出雲流庭園度の評価

A群の3庭は、S50年の調査以降に移築復元や新築された庭であるが、80%以上の出雲流庭園度（該当率）があり、観光案内通り出雲流庭園と胸を張って紹介できる庭であるといえる。

B群の8庭については、出雲流庭園度60%以上であるが、庭の基本構造から石橋酒造庭園、本石橋氏庭園、木佐本陣庭園、八雲本陣庭園は出雲流庭園と呼んでもよさそうである。前述の通り糸原氏庭園、普門院庭園は池があることから、基本構造は該当せず、賛否はあるであろうが、「池泉式の出雲流庭園」と呼んでもよいと思われる。康國寺庭園、一畑寺庭園については、開放的な構造や借景等が庭の主役であり、一見出雲流とは思えないが、「出雲流技法が多く見られる庭」といってよいであろう。ちなみにB群の中では、本石橋氏庭園、木佐本陣庭園、糸原氏庭園が観光パンフレット等で出雲流庭園であると明記している。

C群については、「出雲流庭園の技法が見られる庭」、D群については「ほとんど出雲流庭園の技法が見られない庭園」= 出雲流庭園ではない庭といつてよいであろう。

36年の間に変化が見られた庭園

今回の調査は、S50年著書の庭の平面図を携えて現地を確認したことから、前調査からの庭の変化を確認することができた。

前述の通り、江角昇氏庭園（出雲文化伝承館）、江角栄氏庭園（原鹿庭園）は平成以降に移築復元された庭であるが、建物や庭の形状の変化にともない飛び石や樹木の配置等多少の変化は見られるものの、出雲流技法を忠実に再現していることが確認できた。一方康國寺庭園では、飛び石等の変化はないが、樹木の形状が大きくなり、出雲流庭園の特徴の一つである緑量が少なくシンプルな枯山水庭園の雰囲気を下させつつある。佐草氏庭園は樹木の繁茂により、鬱蒼とした庭となっている。加えて犬走りの舗装化や土橋の石橋への改築、飛び石の配置換え等変化が著しいことが確認できた。

6．終わりに

今回の調査は、S50年著書を基に出雲流庭園の技法のうち、客観的に判断できるものを抜粋し指標としたものである。すなわち「独特のバランス」、「洗練されている」、「京都の茶庭周りのような派手さがない」、「飛び石が主役となっている」といった主観的な指標は採用していない。よって本来の作庭意図や庭の見立てとは関係なく「出雲流庭園度」を評価してしまっているケースもあるかもしれないが、地域に残る庭園の技法の傾向はある程度確認できたもの考える。

庭園は時代とともに人の手が加わり、また樹木の生長などにより変わっていくものである。

今後、個人の所有者の趣向や維持管理の水準に加え、建物の形態の変化や池の循環設備等の作庭技術の発達により出雲流庭園の変化が起こることが予想される。たとえば昨年視察した鰐淵寺本坊庭園は住職が変わるたびに庭を改修し、当初の作庭主旨が失われた庭もある。また今年視察した康國寺庭園や佐草氏庭園のように樹木の繁茂により景観や雰囲気が変化してきた庭もある。この地方に残る独特の文化、魅力ある地域資源として保全、活用するために、「出雲流庭園」の定義、技法を明らかにしておくことは意義があると思われる。

なお、今回活用したS50年著書は、当時関東の造園家が調査したものである。それを地元の造園家の故持田安雄氏が出雲流庭園の技法を伝承する資料として位置づけたものであるが、地元で長年庭園を築造してきた造園家の中にも出雲流技法に関する思いや見解があるであろう。今後はそういった造園家の意見を聞き、出雲流庭園度の指標も更新する必要があると思われる。